

じように積極的ないあらわしかたであり、釈尊の根本の精神が表明されているものとみられる。律蔵の小品には「甘露の門は開かれたり。耳あるものは聞け。自己の(誤まれる)信を棄て去れ。梵天よ、害あるべきを思い、人々に微妙の正法を説かざりき」とのべてある。この心境は、もとより「生已に尽き、梵行已に立ち、所作已に弁じ、さらにかかる状態に還ることなし」(DN.1, p.167)という自覚に裏付けられたものにして、そこに、梵行已に立ち(Brahmacariyaṅ kamaṅ)といわれているから、世尊は梵行者(Brahmacarin)であつたとかんがえられていたことは明瞭である(Milindapañho p. 103-)。梵行が出家者にとって欠くべからざるものであるとされたことは、受戒制度の中に、世尊が比丘の僧伽加入を許された際の「来れ比丘、わが法の中に於て、快よく自ら娛樂し、梵行を修して苦原を尽せよ」なる語が証明している。そこで、正法が説かれるということと梵行を修するということが、法久住のための要件であるとかんがえられたのである。

おもうに、仏弟子たちにとって、その生活規範としての波羅提木叉は、梵木修習のために欠くことのできない学処であり、正法の生命ともいうべきものであった。この点から、十句義の第十番目の項目に関して、僧祇律の述べ方は重要であり、注意せられてしかるべきものがあるとかんがえられる。

燃燈仏について

西尾京雄

一、
 釈尊についてはその歴史性が明にせられて、人間仏陀として、その姓をもってゴータマ仏陀とさえ表現されるようになった。それで、われわれの人間の宗教経験を基として、その外の仏陀や菩薩について人間性を明にすべきでないであらうか。^①

二、

われわれは、現在、釈尊は無師独語によって仏陀となりたまうたという經典と古仙人(漢訳)、過去の正等覺者(正利)によって成道したという城邑(Grāma)経との二種類のものに接するのである。ゴータマ・シッタータは無師独悟とはいへ、父浄飯王、母摩耶によって生をうけ、多くの先人によって求道し成道したのである。

さて、ここで、漢訳の古仙人といひ、巴利伝の過去の正等覺者であるについて、これ等は等々に考えられるものようである。これ等の思想が流れて、巴利伝は大無量寿経の五十三仏となり、漢訳伝は華嚴経の善財童子の善知識の求道歷程となつたものでないか。親鸞聖人は末灯鈔に「釈迦如来の善知識は一百一十人なり、華嚴経に見えたり」と。善知識とは善交の意味でもあり、よく「先立つものは善知識」といわれる、その「先き立つもの」即ち(pubbāka manussa)古仙人、或は過去の正等覺者と考えてよいようである。

三、

燃灯仏は大乗・小乗とも伝え、諸部派共通の財産であって古い伝統をもつものである。^②

燃灯仏 (dīpaṅkaraḥ, Mar-me mdsad) は、「灯光を作り給へる仏」(神氏)、「灯光をつける」、「燈光をもちやす」の意味で、錠光仏とも訳されている。

その灯光とは、自灯 (atta-dīpa) 自依 (atta-saraṇa) 法灯 (dhamma-dīpa) 法依 (dhamma-saraṇa) といわれる灯光の義である。

善財童子は殊殊の説法を聞いて自我にめざめ、法蔵比丘も亦「汝自当知」といわれるように自灯、法灯を求めたことは同一である。それをさとり、成就した人は、ゴータマ、シッダッタ童子(比丘)である。而して、いまもお全人類、二百一十億の有情の自灯、法灯の灯光を作り給える、灯光を燃している方と領受してよいのでないか。燃灯と抽象名詞で表現していることは極めて意義が深い。

四、

山辺先生の人生修行の旅(三二頁)に「十八、九歳の頃、親しくしていた友だちが、寒中休暇にふたりとも死に、それから死の突破のために、非常に長い間道を求めて苦勞した」といわれているが、先生の「燃灯仏」は、先生に求道の灯をともした点から、二人の友人であるといえ得られるのではないか。

宗教的回心を経験する人は、人それぞれ性格や境遇によって、みな燃灯仏を持っているのではないか。

註① 真宗、五月号、特伝、富山教区第十三組の場合、法蔵菩薩

はどこで生れたか。

② 「方広大莊嚴經」(釈尊読本、頁一一)の感想帶広大谷高校一年、島真弓

「アンタは太子の顔を眺めているだけで、将来、太子が人々を恵みたまうということがアンタにはなぜわかったのであるうか。もし、それか、アンタにほんとうにわかったのなら、アンタこそ人々を恵みたまう人ではなからうか。

御児が出家して仏となられる前になくなくてもアンタは心に太子の御教を聞くことができるではありません。アンタ仙人は、偉大な人だと思えます」と。

アンタ (anta) は、又 Kataladevalo といわれ、時に一歳、甥のナーラダ八歳なるを出家せしめ、精舎を鹿野苑に建て、太子転法輪の日より七日目に得道したと伝える。浄飯王の輔師アンタの自信を思うべきである。

③ 燃灯仏の研究、赤沼智善、仏教研究第六卷第三号